

〈学内共同研究報告〉

社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に向けたオンライン 学生自助グループの形成と支援に関するアクションリサーチ

加藤 慶・榎本 則幸・岡田 哲郎・藤田 則貴

Abstract

通信制大学において国家試験に向けた学生同士の仲間意識を形成していくことは重要な課題である。学生の居住地も全国に分かれており、試験に向けた仲間と共に努力する環境や関係性づくりは、通学制大学の学生と比較すれば弱く、面接授業の機会も限られている。オンライン大学である本学において国家試験対策の一環として自己学習と仲間づくりを融合させながら学生をエンパワメントしていく試みを行った。

キーワード：学習の動機づけ 協同学習 メタ認知機能

1.はじめに

2021年8月13日の金曜日を皮切りに、2月の国家試験直前の1月まで計18回「国試オンライン学習ゼミ」として、本学の教員が輪番制で担当した。本学としては、第1期生ということもあり、手探りの中ではあるが、それぞれの教員が前任校等で培ってきたノウハウをそれぞれの「国試オンライン学習ゼミ」の中で、展開していった。8月に進めていく理由としては、「相談援助実習」や「スクーリング」がひと段落する時期であること、また、それにより腰を据えて勉強に打ち込むことができるという事が言える。8月の段階では、まず「仲間づくり」「スケジュール管理」に力点が置かれ、勉強をするという環境整備も含めて取り組んでいった。

本研究の取り組みについては、前半期(国試受験準備期)と後半期(国試受験直前期)に分け、前半期に関しては既に榎本ら(2022)において公表している。そこで、本稿では主に後半期(国試受験直前期)を中心として報告することとする。

【藤田則貴】

2.国試オンライン学習ゼミの試み(後半期の取り組み)

本稿では、それぞれの担当者が前半期を振り返った後、後半期における実践を報告していく。

2.1.1.第1回目の振り返り・2021年9月11日(土)(10:00-12:00)

前回の参加者は6名であり、その内の1名は、アカデミックアドバイザーとして担当している精神保健福祉モデルの学生、もう1名は社会福祉モデルの学生で相談援助実習指導を行った学生であった。他の4名は初対面であり、3名が社会福祉モデル、1名が精神保健福祉モデルであった。

前回の内容は、①自己紹介と現況報告、②国試の取り組みについての不安を語ってもらう、③国家試験を理解する、④受験の手引きの確認、⑤今年度の試験委員の確認、⑥出題基準等の確認、⑦過去問を利用した勉強方法であった。

ゼミを開始した当初は、国家試験に臨む不安や孤独感が見られたが、交流が進むにつれ、終盤では笑顔も見られ意見交換も活発に行われた。

学生の感想として以下のことが示された。「自分を刺激する機会として参加し、実際に刺激されたのでよかった。先生方や、目標をもっている学生と接することが必要でした」、「2学期の成績発表があるまで、やる気が出ない状態でした。指定科目の教科で、単位取得できても3学期もまだ残っている。もし2学期で単位を落としていたら試験の願書を提出しないこともあり、時間だけが過ぎていました。これではいけない、きっとゼミだったらモチベーション向上できるかもしれないと思い参加した」、「本校では、ほとんどの方が仕事をしながら勉強し、国家試験に向けて頑張っていることが分かった。やはり通信大学であっても先生や皆さんと直接話ができることが、大学で学ぶ醍醐味だと思った」、「他の参加者の方も同じように大変な中頑張っていることがわかった」、「先生のお話からまだまだ頑張られることがわかった。どのように勉強したらよいかがよくわかってよかった。大変励みになった」、「共有の場を設けていただき有難うございます。ゼミは毎回のテーマがあれば教えてください。社福の方と一緒に開催は勉強の仕方等や不安等を共有することでしょうか。共有という意味では数少ないスクーリングですが顔と名前が一致している方との方が有難い」、「PSWの方は皆互いに連絡先をしていますが、その場では聞きづらい事が後で聞けないゼミ限りとなってしまうのが残念である」、「前回のゼミでこの場を利用してお互いに・・・ような話がありましたが、本学のメールでは学生同士でのメールが出来ないと思います」。これらのことからゼミに参加した学生は、不安や孤独感を持っていることや学生間の交流（コミュニティの必要性）を求めていることがわかった。

2.1.2.第2回目の実践報告・2021年12月11日（土）（10：00－12：00）

2回目の参加者は5名であり、1名はアカデミックアドバイザーとして担当している精神保健福祉モデルの学生で前回は参加。3名は実習指導を担当した学生で1名は前回参加者で2名は初参加であった。そして、前回から参加している精神保健福祉モデルの学生からの呼びかけにより1名が参加した。

今回の内容は、①前回のゼミから今回までの各自の進捗状況報告、②自主的に取り入れた（参加）教材等の紹介、③受験を目の前に、どのような気持ちかを共有する、④協働学習の効果について、⑤最近の法改正や調査報告等についての情報共有を行った。前回のゼミ開始時よりも国家試験に近づいてきていることを考慮して、この時期は焦りがでる時期でもあることからインプットよりも、なるべく今の心境をアウトプットして、気持ちが整理できるようにファシリテーションを行った。

① 前回のゼミから今回までの各自の進捗状況報告について

第1回のオンライン学習ゼミから第2回目までの各自の進捗状況について以下のような報告があった。学生A：「福祉教育カレッジ、後援：日本社会福祉士会の模擬試験を自宅で受講した。まだ結果は返信されていないが、自己採点で61点、社会理論と社会システムが0点という残念な結果であった」

学生B：「この時期、何度問題を解いても安定しない。ただ苦手意識の問題もわかってきた、科目の関連性や人物と関連する理論なども理解できてきている。仕事中は国家試験のこと

は意識せず勉強もしないようにしている。勉強は朝 30 分早く起きて集中して行っている（全国模試でトップの成績を得ている）」「1 1 月の半ばから、過去に受けた模試の間違ひの選択肢が何故間違ひであるのか、を中心に見直しはしていたのですが、オンライン学習ゼミの時はまだ受験勉強らしいことはあまりしていませんでした。本格的に受験勉強を始めたのは年が明けてからなのですが、受験の 3 週間くらい前に 5 年分の過去問を一通り解いてみて、間違った問題を中心に大学の資料等で学習し直しました。あまり受験に特化した勉強をしなかったは、大学の授業を、本当に 4 年間頑張っていたからです。授業の内容は完全に覚えるようにしていたのと、疑問点は先生に尋ねたりネットで調べたりし、関連する各法律は何条何項まで即答出来るように丸ごと暗記しました。私の場合は過度に記憶してしまうのを避けるため、白書をはじめ毎年変わるデータなどは初めから覚え、本番で出題されたら飛ばすつもりでした」

学生 C:「お金を掛けて国家試験対策を行うことでモチベーションを挙げている。個人で行うには限界を感じてしまいために、業者が行っている受験対策講座を受講している。お金を払っているということで無駄にしたいくない思いから集中して取り組んでいる」「自分も有料の講座に参加したり、模擬試験を受けている。模擬試験を受けてそれをやり直すことで理解を深めている」

以上の報告から、前回の報告では、まだ学習の進め方など漠然としているため、何をすればよいのか、どのように取り組めば良いのか、自分ができるのかなどの不安感が見られたが、今回の報告では、自分に合った取り組みを見つけ、取り組む上での不安が述べられていた。自分に合った取り組みを見つけるにあたっては、仲間からのアドバイスや情報で後押しされたことがわかった」

オンライン過去問学習についての報告として以下のコメントがあった、。

学生 A:「過去問題は二度と同じのが出題されないのと、試験までに時間がないのでやっていません。1, 2 回目はやりましたが、解説もなく、問題集の方が効率よくできると思った」

学生 B:「少しだけやってみた。解説がないので、なぜその答えが間違いなのか自分で調べないといけないため、効率が悪い。選択肢に誤字があり、迷った挙句間違った答えを選んでしまった」

学生 C:「@ROOM のエラーのため一度目で断念した」との報告が挙げられた。

また、参考までにということで、学生 C より以下の報告があった。

学生 C:「チャレコクで先生が仰っていた、一問一答ですが、答えに文字列をきく問題は良いのですが、○×問題は人によっては避けた方が良いでしょう。私も結構そうなのですが、×の問題文をそのまま覚えてしまうという危険性があります。若い方ならば問題ないと思いますが、融通が利きづらい年齢層が高い組で勉強会をしていると、やはり×の問題を頭のどこかで覚えていて、その後の誤答が増えた」

② 自主的に取り入れた（参加）教材等の紹介について

各自の進捗状況報告にもあったように、有料の対策講座、模擬試験が紹介された。また過去問題集の使い方として、「各科目のキーワードを抜き出して覚えていく、解説を読んでわ

からないことや新しいキーワードがあれば、調べて理解するようにしている」「中央法規の社会福祉士合格アプリ、国家試験受験対策 WEB 講座をダウンロードしました。通勤時間の電車の中でアプリ問題を解き、WEB 講座を聞いていました。WEB 講座は国試ナビのテキストを早口で読まれているのですが、頭に入ってこなくてやめてしまいました。最近 JIN ちゃんねる 社福の学校をはじめました。落ちたら学費返金されます。11 月のオンライン学習ゼミで参加者が話していたのをきっかけに取り入れてみた」「パソコン、スマートフォンを使って調べるとのこと。オンラインゼミで知りあった仲間からの情報を得たら、パソコンやスマートフォンを使い、キーワード検索して調べたり、国家試験対策で検索して他受験生が使用している教材などを知り、取り入れている」「過去問とワークブックは、大学からの案内にあったものの中から選んだ」「精神保健福祉士の国試ナビ・社会福祉士の合格教科書は、有料講座で使用するため購入した」「一緒に勉強会をしているクラスメイトたちと一緒に各々 Amazon で購入しました。あまり詳細に解説されたものではありませんが、過去問を踏襲していると書かれてあったので私が皆に勧めました。ただ、まだ知識が浅い方は読んでもよく理解出来ないらしく、ある程度勉強している方はこれだけ覚えれば十分とも言っていました。私も一度過去問を解いた後は、とても読みやすいと感じたので、膨大なものを覚えるよりは効率的であった」

③ 受験を目の前に、どのような気持ちかについて

「正直、第 34 回は受かる自信がありません。もう 1 年、時間をかけて再来年に挑戦しようと思う反面、学校を卒業してしまったら、今まで以上に誰とも交流がなく、モチベーションもなくなってしまうのではないかと不安。試験会場の雰囲気は、今年、さいたまスーパーアリーナで介護福祉士を受験したので似たような感じかなと思っている」「焦りと不安ばかり」「模擬試験の点数も低いため、受かる気がしない。あと数か月で合格ラインまで上げられるか自信がない」

④ 協働学習の効果について

協働学習の効果については、前回提示したように、学習におけるグループダイナミクス研究の先駆者であるデービット・ジョンソン (Johnson, D. W.) とロジャー・ジョンソン (Johnson, R. T.) は、学習を他の学生と競争させる「競争」学習、一方向で教員の講義を聴き個人で学ぶ「個人主義的学習」、グループで学び合う「協同学習」に分け、「協同学習においては競争的な学習や個別学習よりも高い成績、協調的な人間関係、より望ましい精神面での適応をもたらす」と結論付けている。また、共同学習の成果を大きく三つに分けて、一つ目は達成への努力、二つ目は協調的対人関係、三つ目は心理的適応であり、この三つは相互に因果関係を持っているとする。達成への努力として、達成のために仲間との意見交換が活発になる、自己の知識や結論を再構築する過程で題材をより深く把握し記憶にとどめる、他の学生の持つ考え方や情報を受け入れ活用する、そして高次の推論能力や批判思考能力を助長することを挙げている。協調的対人関係では、仲間同士互いに好感を抱き仲間の発言に耳を傾けようとする、外部からの非難から仲間を守ろうとする、学習の熱意が強くなる、挫折に絶える力が身に付く、教員に好感を抱く、教員との交流が増えることを挙げ、心理的対応では、情緒的成熟を促し社会的視点を取得できる、自尊感情が伸びると考えている。

このことからオンライン学習ゼミの取り組みは、学生たちが国家試験に向かうためにオンライン上の語らいの経験を継続させることで意欲喚起になり、協同学習の効果による包括的な視点からのサポートを提供することができると考えられる。「国家試験対策は、学生が主体的に受験に必要な知識を身につけることが前提となるが、この目標を達成するには、数多くの難問が待ち受けている（田中ら、2019）」との指摘があるが、このことを克服していく手段の一つとして意義があるものと考えられる。

今回のゼミにおいて受講者からの協働学習の効果についての意見として、「もっと頑張らないといけないという気持ちになる」「同じクラスの方と、ライン交換はしていましたが特に連絡はしていませんでした。オンライン学習終了後すぐに参加者とラインし、問題を出してもらった」「仲間とコミュニケーションを取ることで安定して学習ができる」「今回のゼミ参加したのも、初回のゼミで知り合った方が参加していることから、声をかけられたので参加している。仲間が居なければ参加していない」「実習担当の先生のゼミだったので参加しやすかった」「アカデミックアドバイザーの先生のゼミだったので参加しやすかった」「スクーリングで会った人がいたので話しやすいため参加した」「個人だと情報が限られてしまうが、仲間が情報を提供してくれるので助かる、心強い」「ラインを使って試験問題を送り合っている」「やはり通信制大学において、直接他の学生の意見を聞くことが出来る場は貴重だと思います。あまり「出来る」意見を聞くと委縮してしまう、、と後で個人的に話していた方もいらっしゃいましたが、受験勉強をする上でのヒントは得られると思います。参加人数が少なかったり固定されていたりで実際は難しいのかもしれませんが、月に一度ではなくせめて週一で意見交換出来る場があると「間に合う」方も出てくるのではないかと思います」との意見が挙げられた。

前述したように、「国家試験対策は、学生が主体的に受験に必要な知識を身につけることが前提となるが、知識等を身につけられる安定した環境が必要である。このオンラインゼミ学習が安定した環境を作り出す効果があることがわかった。また、参加者の中に、ラインを用いて問題を提供している者がおり、他参加者から称賛があった。参加者同士、互いの取り組みや提供された情報について評価をすること（誉められること、励まされること、存在を認められること）でモチベーションが上がるのではないだろうか。ゆえに精神的報酬と物質的報酬も国家試験対策には大切な要素であると考えられる。

⑤最近の法改正や調査報告等についての情報共有

オリンピックを目指して厳しいトレーニングを積んでいるアスリートにとって、オリンピック出場は「精神的報酬」になる。しかし、それだけでは目標が遠すぎて、今現在のトレーニングの苦しさにくじけそうになるかもしれない。そのようなときに、練習後のおいしい食事やデザートなどの「物欲的報酬」をイメージすると聞く。トレーニング後の楽しみが、苦しさを乗り越える原動力になるようだ。

物質的報酬の一つにでもなればと思い、ゼミの最後にレクチャを行った。「確認しておくべき法改正や新制度、調査結果など」というテーマで、各省庁が出している白書や通知、最近実施された調査とその結果について確認をして共有を図った。

「精神的報酬」と「物欲的報酬」のどちらか一つだけでは、困難や壁を乗り越えることはできない。心と物、または、理想と現実についてよく見つけ、異なった二つの報酬の balan

スをとるように心がけると、目標に向かって走り続けるためのモチベーションを保つことができるのではないかと。

オンラインゼミを行っていくうえで、前述した二つの報酬のバランスをとるように心がけ、国家試験合格を目指す学生にとっての「精神的報酬」と「物欲的報酬」について、考えていきたい。

【榎本則幸】

2.2.1.第1回目の振り返り・2021年10月9日(土)(10:00-12:00)

1回目の参加者は9名であり、4名はオンライン学習ゼミに初めての参加であった。ゼミの内容は大きく次の二つである。一つ目は、国試対策に向けての勉強法、二つ目はモチベーション管理についてであった。一つめの国家試験対策の勉強法については、社会福祉学を学ぶ学生が、一般的に苦手としがちな社会保障制度の勉強法として、教員自身が過去の受験時に用いた参考書を紹介した。二つ目として、モチベーション管理についてである。勉強方法としても位置付けられるが、社会福祉をテーマとする映画をいくつか紹介し、活用方法について自らの経験を踏まえて説明を行った。自らが詳しく知らない福祉の領域でも手がかりとなるイメージを自分の中で作っておくことにより問題を解く糸口となることを紹介した。

学生の反応として、通信制大学における学びにおいて普段の学習は孤独になりがちであるがお互いに学びの状況を報告しあうことで、一人ではないことを確認でき、国試対策のモチベーション向上にとなったという意見が出された。

2.2.2.第2回目の実践報告・2022年1月15日(土)(10:00-12:00)

1)取り組み

今回は試験直前の時期である。国家試験の可否は、1点の差異によって左右されるものであり、いかにその1点を上積みできるかに焦点をあてて内容を構成した。具体的には、①国試対策直前の勉強状況のわかしあい、②試験会場の状況確認と当日準備、③「心理学理論と心理的支援」のポイント解説として、「心理学理論と心理的支援」の過去問によく出題される心理検査を扱った。特に、社会福祉士・精神保健福祉士の受験者にとって実際に心理検査ツールに触れることがないためにイメージしにくい心理検査等の具体的な内容(ロールシャッハテスト・WAIS・WISC・YG検査・長谷川式認知症スケール・認知行動療法・自律訓練法)について、動画なども用いながら解説を行った。

社会福祉士・精神保健福祉士が連携をして仕事をする事となる公認心理師がそれぞれの心理検査を、どのような対象年齢に対して行うのか、心理検査を用いる意図などを説明した。また、社会福祉士・精神保健福祉士が心理検査の具体的なイメージが持ちにくい背景として、心理検査の内容は一定の資格要件を満たす心理職以外には内容が漏れることがないように機密となっていることがあり、他職種は直接触れることができないことを伝えた。

2)結果

参加者は6名であった。全員がそれまでの面接授業や実習指導などで関係をした学生たちであり、教員にとっても学生の実習後の学びの様子を聞くことができる貴重な機会となった。国家試験の直前ということから、一様に不安な気持ちが強いという意見が聞かれたが、

同時に大学卒業も近くなっており、卒業後の次の学びに向けた準備をしているという前向きな声も聞かれた。

また、試験会場にて試験を受ける際に準備しておくべきものの確認や、トイレ、昼食、防寒対策など、個別具体的な注意について、参加者相互にそれぞれの準備や工夫について共有することで、試験当日の具体的なイメージをもつことができた。心理検査については、それぞれで何をみようとするのか、どのような時に用いるものなのか、対象年齢について解説し、さらに自律訓練法についてはオンライン上ではあるが実際に行い、体験をさせた。

ゼミ実施後、参加した学生からのアンケートから、良かったこととして次のようなコメントが寄せられた。抜粋して紹介する。

「仲間と話が出来たことが良かったです。」

「皆さんの頑張りを見てモチベーションをあげられたこと、そして普段オンラインで一方的に講義を聴いているだけでしたが、生で先生方に講義をしていただけたということは大変貴重であり、ありがたいと思いました。苦手なところもよくわかりました。」

「皆が苦手なところを解説していただけたところが良かったです。」

「受験直前のこの時期に、当日の細々とした質問に答えて頂けたことで、不安な事柄に対しての準備ができそうです。また、同じ気持ちで頑張っている方々と時間を共有できたことで、とても励みになりました。」

「動画を見せてくださり、それがどういうものであるかが印象に残りました。」

3) 考察

今回のゼミは、いかに1点を上積みできるかに焦点をあてて実施したものである。2022年2月に行われた社会福祉士・精神保健福祉士国家試験「心理学理論と心理的支援」では、「心理検査に関する次の記述のうち、最も適切なもの1つ選びなさい」という設題があり、ウェクスラー児童用知能検査(WISC)、ミネソタ多面人格目録、長谷川式簡易知能評価スケール、ロールシャッハテスト、矢田部ギルフォード(YG)性格検査のそれぞれの心理検査の具体的な内容の適否を問う問題が出題された。国試オンライン学生ゼミにて詳細に解説を行ったものが、ほぼそのままの形で出題されており、ゼミ参加者から「ゼミのおかげで得点ができました!」というメッセージが寄せられた。このため、目的を達成することができたと考える。

通信制大学で学ぶ学生にとっては、日常的な学びの過程は孤独な学習となりやすい。学生のコメントからは、オンライン上ではあってもリアルタイムにお互いの経験を共有することの出来る機会は励みともなり、大きな意味をもつことがわかる。

また、本学のメディア授業はオンデマンド授業が基本となるため、同時双方向に学生と話ができる機会は、教員にとってのメリットもある。学生の反応から学生はどこがわからないのかをその場で把握し、対応できることである。さらに学生はその場における教員の働きかけから、共に考える仲間がいることで共同学習をすることができ、思考の深まりを得られたと考える。

一方で、一つの科目に特化してオンライン学習ゼミを行うのではなく、「網羅的な試験対策を行って欲しい」という意見のほか、「大学内で勉強会ができれば良かった」「仕事と重な

り、参加できない回もあったため、もっとゼミの回数を増やし、また開催する曜日を複数にするなどの対応があると良い」という意見も参加者より寄せられた。

オンライン学習ゼミの目的は、学生の自助グループの形成支援・仲間づくり、そしてモチベーション・スケジュール管理にあり、いわゆる試験対策予備校が実施する国家試験対策講座とは性格を異にするものである。通信制大学である本学では、大学における学習を本務とするいわゆる通学課程の学生と異なり、学生たちの多くは仕事や家庭などそれぞれの生活を有しながら学びを両立させながら学ぶ必要がある。また、それぞれの生活時間帯や住んでいる地域も異なっている。さらに新型コロナウイルスの影響により、緊急事態宣言などさまざまな行政による要請もあり、多くの学生を一度に大学に集めて講座を開催することも難しい時期であった。オンライン大学である本学の特徴を活かして、より効果的な国家試験対策の方法を模索していきたい。

【加藤 慶】

2.3.1.第1回目の振り返り・(2021年9月11日(土))(14:00-16:00)

前回参加者の7名中、6名は過去に面接授業(スクーリング)等で担当した学生であり、1名は教員と初対面であった。前回の内容は、学習の「スタート支援」という意識をもち、同じ目標に向かう仲間との「出会い」の時間として「自己紹介」を設定し、互いに「現在の学習状況」を報告した上で、①基本の勉強方法や参考資料についての情報提供、②ワークシートを基にした参加者間の情報交換、の二つの柱立てでゼミを進めた。

参加者の状況としては、「早い時期に学習を始め、模擬試験でも良い成績を得た人」と「まだ本格的に学習を始めておらず、模擬試験の成績も芳しくなかった人」が、ほぼ二極化していた。後者の学生は前者の学生に刺激を受け、学習を進める動機付けを得て、一方、前者の学生も「皆さんとの交流で国試に向けて気合いを入れられた」と、モチベーション維持のため本ゼミを活用したようであった。

結果として、「学習の動機付け」、「学習方法を知る」、「情報収集」という観点から、学習の「スタート支援」としての効果がある程度果たせたと考えられた。その一方、今後の学習支援にあたっては、①継続した学習の動機付け支援、学習環境を整える支援、②「知識を獲得する講座」(1点でも上積みできる対策)に対するニーズ、③「ゼミに参加できない/しない」学生への配慮、という三点の必要性が見出された。

2.3.2.第2回目の実践報告・2022年1月15日(土)(14:00-16:00)

1) 取組み

今回は試験直前の時期でのゼミ開催であり、①学習の動機付け支援(試験までのラストスパートを後押しする支援)と、②「知識を獲得する講座」(1点でも上積みできる対策)に対するニーズに応えることを念頭にプログラムを組んだ。

具体的には①について、ゼミの始まりに「試験直前の気持ち、情報の共有」として、一人ひとりの発表時間を設け、クロージング(締めくくり)の時間には「試験に向けての意気込み」を一人ひとりに発表してもらい、最後に教員からの「試験までのラストスパートを後押しするメッセージ」を贈ることとした。また、②として、全体の中で50分ほどの時間を使った「ワンポイント講義」として、自己学習のみでは理解や対応が難しい「時事問題対策」と「地域共生社会政策」「社会福祉・地域福祉理論」の解説を行った。

2) 結果

参加者は6名であり、全員が過去に社会福祉士実習に係る面接授業（スクーリング）や学内代替実習で教員と面識のある学生であった。卒業を間近に控え、今回が最後のゼミの機会ということもあり、それぞれに「かつてお世話になった教員に会いたい」という思いや、「教員が専門にしている地域福祉に関する知識を得たい」という考えでゼミへの参加を決めた学生達であった。

当初は参加者間の情報共有の時間を多めにとる予定でいたが、参加者一人ひとりに「試験を直前に控えた気持ちと学習状況の共有、有益と思う情報」について話を聞くと、既にそれぞれに行ってきた学習の土台や方法があるため、「試験当日まで、あとはそれをやり続けるだけ」という状況であった。この時期（試験直前）の参加者のニーズとしては、情報の交換そのものより、「モチベーションを高めること」、「教員の話を知りたい、教員と話したい」というニーズが高いことを察知した。そのため、予定より少し早めに「ワンポイント講義」の時間に入ることとした。以下は、学生からのアンケートの抜粋である。

「単純に学生や先生と交流できて、嬉しい。情報などは、今はそこまで必要ないが、頑張ろうと思わせる交流を求めている気がする。なので、今回参加できてとてもよかった。」

「ワンポイント講義」に関しては、時事問題対策として、近年の法制度の改正や社会の動向等をまとめた年表を共有し、試験当日までに目を通しておくよう勧めた。また、暗記ではなく「理解」が求められ、かつ、得点にも結び付くと考えられる「地域共生社会政策」と「社会福祉・地域福祉理論」について、パワーポイントに整理して解説した。試験直前の時期に新規の情報を伝えることで混乱をきたすリスクも考慮した上で、政策や理論の詳細に触れるのではなく、あくまでも「参考情報」として「試験につながるポイントを捉える」ことを強調した。以下は、参加学生からのアンケートの抜粋である。

「（よかったことは）着目点などをわかりやすく教えてくれたこと。仲間と楽しく参加できました。」

「具体的な対策が聞けて良かったです。この時期に新しい情報は不安があるけど、だからこそ頭の片隅に無理にでも叩き込んで少しでも点数を上げて合格したいと思いました。」

クロージングの時間では、参加者一人ひとりから試験に向けての意気込みが語られた。全員に共通し「国家試験に合格し、晴れ晴れとした気持ちで、笑顔で卒業式に出席したい」という気持ちが支えになっているようだった。そしてその時まで「自分を律して学習に取り組む」という覚悟が共有された。最後に教員から、そうした気持ちや決意を後押しするメッセージを贈った。具体的には、「理容師から転職し、前回の社会福祉士国家試験に合格し、今は福祉現場で活躍している友人」のエピソードに引き寄せる形で、「学習方法は多様であり、自分の勉強法を信じて最後までやりきること」、「当日のパフォーマンスを最大とするために、この時期は体調管理にも意識を向けること」、「社会福祉士資格取得後の職場待遇の変化、資格取得のメリット」、「この時期の追い込みと粘りが合否を分け、自分自身の納得にもつな

がること」、「資格取得はあくまでも目的のための手段。東京通信大学第1期の卒業生として、良い仕事をするため、説得力のある実践を行うため、高い志をもって資格取得を目指してほしいこと」等を伝え、最後に、気合いを入れるための「一本締め」を行った。以下、参加学生からのアンケートを抜粋する。

「(よかったことは) 仲間と話が出来たこと。先生のお話を聞けたこと。一本締めも良かったです。気合いが入りました。」

「来月が受験なので、この時期はひたすらにこの勉強で合っているのか、みんなもっと勉強しているんじゃないかと不安な毎日ですが、この時期にみんなの顔を見ることができて良かったです！あとは試験終わった直後くらいに可否前にお互いを労うように会えたら良いな！！と思います」

3) 考察

以上のように、試験直前の時期に開催した今回のゼミは、①「学習の動機付け支援（試験までのラストスパートを後押しする支援）」の機能を果たし、②「知識を獲得する講座」（1点でも上積みできる対策）に対するニーズをある程度満たすことができたと評価できる。一方、次年度以降の学習支援につながる下記の課題が見出された。

①について、参加者の中には、国家試験対策への着手が遅く、今も学習を習慣化できていないという学生もいた。したがって、この時期の「動機付け支援」が、どれだけ効果的であるかは定かではない。むしろこの時期に至るまでのなるべく早い段階で学習方法を学び、学習を習慣化させる機会の提供が重要であり、今後の課題といえるだろう。逆にいえば、今年度は、東京通信大学「1期生」の学生達に元々備わっていたモチベーションがあったため、それを補完するサポート体制・プログラムがある程度機能したとも考えられよう。

次年度に向けては、他大学の例にもならない、より積極的な学習支援と環境整備を検討する余地がある。「事情があってゼミに参加したくてもできない」学生や、「あえて参加しない」学生への配慮を行いつつ、早期に学習方法を学び、合格へのモチベーションを高め、学習を習慣化させる仕掛けを検討していく必要があるだろう。「大学内で勉強会が出来たら良かったです」という声もあり、「オンライン学習部屋」の設置とあわせて、対面で集うことができる学習部屋の確保も検討の余地があると思われる。

一方、下記の学生意見も参考に、そうした仕掛けが学生の自主性を削ぎ、「強制的」で「一律的」と感じられるものにならないよう留意したい。

「受験対策は、人それぞれなので正解はないし、サポートもそこまで気にしなくていいと思う。参考書の選び方ひとつとっても、合う合わないがある。大学は、受験生の合格に向けて様々なサポートをしてくれている。やるかやらないかは本人次第。私は、今回先生や学生の皆様と交流できて、モチベーションがあがった。ギリギリ合格できるように、やれることはやります。そして、(ゼミ終了後の) 資料もありがとうございます。迅速な対応はサポートの一つになってます。」

次に②についても、今回のゼミで行った「ワンポイント講義」は、本来は遅くとも夏頃までに行うものであると考える。知識のインプット（出題傾向をふまえた全体内容の把握）を早い時期に行えれば、過去問や市販のワークブックを中心としたアウトプット学習をより効果的に積み重ねることができるだろう。

今回のゼミでは、「試験直前」時期に適した内容として、教員の専門分野に沿った知識を断片的に伝達したが、より系統的に「知識のインプット（出題傾向をふまえた全体内容の把握）」を行う講座を大学として提供できるのか、あるいは外部の講座や教材を活用できるのか、検討していく必要がある。その際には、今年度行った「オンライン学習ゼミ」の機能を組み合わせ、適宜「実力試し」（分析）の機会となる「模擬試験」を組み合わせ、学習支援のプログラムを全体的に見直す必要がある。以下は、他の回に出席した学生の声である。

「まだ国家試験受験に対して意識が低い時期に模試を受けさせて頂いたことがとても良い刺激になったので、本番までに 2 回くらい受ければ良かったな...と、今は感じています。」

「①毎月決まった週と時間に（オンライン学習ゼミが）行われていたが、その時間に毎回仕事が重なり参加できないこともあったので、回数を増やすか、月によって週や時間をバラして欲しかった。②東京通信大学の教員による各科目の集中講義を対面（あるいはオンライン上）で行って欲しかった。③この科目はこの教員が得意という一覧を示していただき、各試験科目で躓いたとき簡単に質問できるようにして欲しかった。」

最後に、今回の共同研究の大きな目的の一つに「学生自助グループ」の支援があった。この点に着目し、今回のゼミの参加者から聞くと、ところによると、「見知った仲間と自主的に勉強会や定期的な情報交換会を行っている」状況があるということである。その多くは面接授業（スクーリング）や学内代替実習で知り合った仲間とグループを形成しているようであるが、今年度行ってきた「オンライン学習ゼミ」の間接的な影響が少なからずあると思われる。これについて卒業生にアンケート調査を行い、自助グループを形成していたか、もし行っていた場合どのような経緯でグループを形成したかを尋ね、その内容を分析することが必要だろう。

また、今年度の国家試験に合格した卒業生が、不合格となった同期の学生を支える形で勉強会を開始している。この事例からは、卒業生が同期だけではなく後輩をも支援する「学生自助グループ」の可能性についても展望することができる。今後は「卒業生とのつながり」も国家試験対策を考える上での大きなポイントとなるのかもしれない。

参考）他の回の感想より

「皆さん最後の実習での演習のグループで仲良くなって共に受験勉強の情報をやりとりしている方が多いようですが私は実習を受けなかったので一人で情報もなく勉強していました。学習オンラインは皆さんの様子、試験の情報がわかってよかったです。無理にグループを作ってはいけないとは思いますが私のような人たちもいると思うので 4 年生になったらある程度グループで受験勉強の情報がやりとりできるよう大学の方でもサポートしていただけるとよいかなと思いました。」

「一人で勉強をしてきましたが、学習オンライン通じいろいろな方たちが集まって一緒に勉強していることを知りましたが、時期が今更と思ってしまい、そこからグループ作りをしようとは考えませんでした。(手段もわかりませんでした)。もっと早くから学習オンラインが始まっていたら自分でも積極的にグループを作っていこうと考えていたと思います。早い時期からのグループ作りができるようなしくみがあるといいと思いました。」

【岡田哲郎】

3.総括

本稿の「はじめに」において述べたように、「仲間づくり」や「スケジュール管理」について、戸塚(2018)は「SECI」モデルを踏まえて『社会福祉援助教育に求められるもの』であると述べている。そのため、それを本稿のタイトルともしている「社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に向けたオンライン学習と学生自助グループ」に照らし合わせながら検討していく。

まず、戸塚(2018)は『社会福祉援助教育に求められるもの』として、「しなやかで柔軟性をもつソーシャルワーク実践力を養成する諸条件を、野中氏ら(2010)による「SECI」モデルを踏まえて展開している。

①第一モード；個人レベルにおける共同化 (Socialization) ②第二モード；グループにおける表出化 (Externalization) ③第三モード；組織における連結化 (Combination) ④第四モード；個人レベルでの内面化 (Internalization) において、野中 (2010) らは、共同化 (S)、表出化 (E)、連結化 (C)、内面化 (I) という四つのモードからなる刺激的な知識創造プロセスを、絶え間なく進展していく動態のプロセスとして捉えている。

まず、共同化 (S) は、他者と共通の時間・空間を過ごす体験 (相互作用) を通じて、個人の暗黙知が複数人と共有され、そうした関わりのなかからさらに新たな暗黙知が創り出されていく動態的な知識創発の局面になる。野中らによれば、本来 (相手と) 異なる存在としての個々人が、個別具体的な世界の内に「棲み込む」という「共に生きる体験」を通じて、彼の「世界」に広がる暗黙知を共有し、自分の内にそれを落とし込んでいくとされる行為である。その中で戸塚(2018)は、「棲み込み」は、社会福祉実践教育で最も大切にされる“共感によって得られる気づき”や“発見から得られる知識の獲得・共有化のプロセス”をまさに状況 (実態) に埋め込みながら教えてくれることになる」と指摘している。

上記の「棲み込む」という「共に生きる体験」は、まさに「仲間づくり」において一緒に場を共有することにより、その中から得られる「気づき」や「学び」が更に意欲を掻き立てることに繋がるのではないかと考えられる。

次に、表出化 (E) については、個人の暗黙知を集団としての知へと発展させていくことになるプロセスである。社会福祉実践では、同一専門職のみならず、異分野、異業種の専門職同士がさまざまな関係性を通して、多様な切り口から解決策を練り上げていくことが日常的に展開されている。としている。また、野中ら(2010)は、「他人の視点・立場に立つ」感覚を学生達が徐々に取り込んでいくとき、「それまで自分を支えてきた価値観を飛び越える発想の飛躍が起きる」としており、それは、戸塚の言う「個の埋没」ではなく、「場」を共有している参加者同士がお互いを認め、受け容れあうという結果の故の大きな産物と言えると指摘している。また、それは「オンライン学習」と「学生自助グループ」という「場」

を通して「共感」し、同じ仲間の存在自体が、一人で学習を続けているという孤立感を軽減させ、更には「学生自助グループ」によって高め合っていくことに繋がるのではないかと。

また、連結化（C）は、前段階までの形式知がより高次の形式知へと進化し、組織レベルの形式知に体系化されていく段階となる。野中ら(2010)は、これを「連結化」と位置付けている。具体的な事象に「落とし込む」という体験を通じて知識の統合化が促進されていき、新しい形式知が創造されていく。その場を共有するさまざまな関与者（プレイヤー）が蓄えている知識を繋ぎ合わせ（連結）、構造化させていくプロセスになる。連結化というプロセスでは、それぞれの関与者（プレイヤー）間で相互関係のダイナミズムが起これ、それまで形としては見えてこなかったさまざまな矛盾さも表面化されていくことになる。

「学生自助グループ」の存在が、まさにそれぞれの関与者（プレイヤー）間で相互関係のダイナミズムが起これ、学習意欲へと繋がっていくと考えられる。

最後に、内面化（I）は、共有化された知識を再び個人の内に取り込み暗黙知化し、既に蓄積している知識と融合させ、新たな知として、個人のなかに落とし込む局面である。共有化され創造されていった形式知が、「連結化」を経て再び新たな知として個人のなかに蓄積されていく段階になる。こうして得られた知識は、慎重に反復・再編成を繰り返しながら、実践に反映されていく。これにおいても、「オンライン学習」によって得られた知識や社会福祉士、精神保健福祉士の国家試験過去問題を慎重に反復・再編成を繰り返すことによって、それぞれの国家試験に「合格する」という実践に反映されていくと考えられる。

この、野中ら(2010)が示した、共同化（S）、表出化（E）、連結化（C）、内面化（I）という四つのモードからなる刺激的な知識創造プロセスを別の視点から捉え、見ていくこととする。この四つのプロセスは、本学で昨年度から始まった「国試オンライン学習ゼミ」において、上記プロセスに従って応用できるのではないかと、筆者は考えている。「国試オンライン学習ゼミ」は、2021年8月13日から国家試験直前の2022年1月15日までの計18回に亘って行われ、前述の共同化（S）、表出化（E）、連結化（C）、内面化（I）を意識して捉えていく必要があるのではないかと考えている。一方で、「国試オンライン学習ゼミ」終了後に行った学生向けのアンケートの内容からも上記の「SECI」の必要性を感じている。

初期段階の「共同化（S）」においては、戸塚(2018)の言うように、「棲み込み」は、社会福祉実践教育で最も大切にされる“共感によって得られる気づき”や“発見から得られる知識の獲得・共有化のプロセス”をまさに状況（実態）に埋め込みながら教えてくれる。としているように、「国試オンライン学習ゼミ」のアンケート内容においても、「みんながどのような勉強法を取り入れて行っているのかが分かった。」と示しているように、“共感によって、気づく”ということによって、発見から得られる“自分自身のスケジュールを管理する”という新たな知識の獲得へと繋がっていくのである。

また、「表出化（E）」においては、戸塚(2018)の言うように「個の埋没ではなく、「場」を共有している参加者同士がお互いを認め、受け容れあうという結果の故の大きな産物」へと繋がっていく、まさに「国試オンライン学習ゼミ」を通じて、受講者が、“場を共有”することによって、受講者同士がお互いを認め、受け容れあい、「国家試験合格」への道筋をつけていく重要なプロセスになるのではないかと考えている。

次に、「連結化（C）」においては、野中らが示すように「その場を共有するさまざまな関与者（プレイヤー）が蓄えている知識を繋ぎ合わせ（連結）、構造化させていくプロセスに

なる。連結化というプロセスでは、それぞれの関与者（プレイヤー）間で相互関係のダイナミズムが起こり、それまで形としては見えてこなかったさまざまな矛盾も表面化されていくことになる。」という、「国試オンライン学習ゼミ」の受講者（ここで言う関与者（プレイヤー））が、今まで行ってきた「授業」、「国試オンライン学習」、「模擬試験」で蓄えてきた知識を繋ぎ合わせ、構造化することによって、受講者一人ひとりが「苦手科目」や「高得点科目」等を把握し、それを基に学習を進めていく手掛かりをつかむ「場」となり得るのかもしれない。

最後の「内面化（I）」においては、「共有化された知識を再び個人の内に取り込み暗黙知化し、既に蓄積している知識と融合させ、新たな知として、個人のなかに落とし込む局面」でもあるため、「連結化」を経て再び新たな知として個人のなかに蓄積されていく段階になる。

そのため、「連結化（C）」で示した、特に「苦手科目」を慎重に反復・再編成を繰り返しながら、さらには、全科目群において「0点科目」を修得しない。また、「高得点科目」を確実に押さえ、実践に反映させていく。ということが必要になってくるのではないかと。また、「仲間づくり」をさらに発展させ、その「場」を共有するとともに「SECI」モデルも取り入れながら、教員側も受講者に対して“刺激”を与えられる存在であるとともに、それをアシストできる存在であることを心がけたい。

【藤田則貴】

謝辞

本研究を進めるにあたり、2021年度国試対策チーム長を務められた松為信雄名誉教授より有益な助言を頂きました。松為信雄名誉教授をはじめとする国試対策チームのメンバーの皆様に対して、記して感謝の意を表します。

付記：本報告は、2021年度東京通信大学共同研究費の助成を受けて行われた活動の一部である(研究課題名:社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に向けたオンライン学生自助グループの形成と支援に関するアクションリサーチ、研究代表者：加藤 慶、研究分担者：榎本則幸・岡田哲郎・藤田則貴・都築繁幸)。本研究は、共同研究者全員で行い、その一部は『東京通信大学紀要』4,pp.261-273.に報告した。本報告の執筆にあたっては、それぞれ執筆個所を明記した。

文献

榎本則幸・岡田哲郎・加藤慶・藤田則貴・都築繁幸(2022)「社会福祉士・精神保健福祉士国家試験に向けたオンライン学習と学生自助グループの支援の試み」『東京通信大学紀要』4,pp.261-273.

戸塚法子 (2018)「社会福祉援助教育に求められるもの」『淑徳大学高等教育研究開発センター年報 第5号』淑徳大学高等教育研究開発センター.pp.19-25

野中郁次郎・遠山亮子・平田透(2010)『流れを経営する-持続的イノベーション企業の動態理論-』東洋経済新報社

加藤 慶（かとう けい） 東京通信大学 人間福祉学部 講師
榎本 則幸（えのもと のりゆき） 東京通信大学 人間福祉学部 助教
岡田 哲郎（おかだ てつろう） 東京通信大学 人間福祉学部 助教
（＊2022年4月からは高崎健康福祉大学健康福祉学部講師）
藤田 則貴（ふじた のりたか） 東京通信大学 人間福祉学部 助教